

# IBALAB@広場

つづく、ひろがる広場の風景



# IBALAB@広場 (イバラボひろば)

「おにくるをどんな場所にしよう？」

IBALAB@広場は、おにくるの整備に向けて、みんなで使い方を試したり、小さく始めてみる場所、  
公共空間を「使う」視点で考える「実験場」としてつくられました。

だから、実験室を意味する Laboratory (ラボラトリー) から、  
「LAB」の文字を入れて IBALAB@広場、です。

コンセプトは

## 「育てる広場」

この「場」をどんなふうに使い、つくりあげていくのか、  
みんなで一緒に考え、育んできました。

※ 「おにくる」は 2023年11月にオープンした「茨木市文化・子育て複合施設 おにくる」のこと。



# 市街地のほぼ真ん中で

## 多様であること・小さく始めること

IBALAB@広場は、芝生広場、下の広場、噴水広場という3つの性格の異なるエリアで構成されているので、使う人によって、一体的にも、バラバラにも形を変えて使うことができます。

また、芝生広場の真ん中にあるウッドデッキは、ステージになったり、一緒に座る縁側にも変わります。

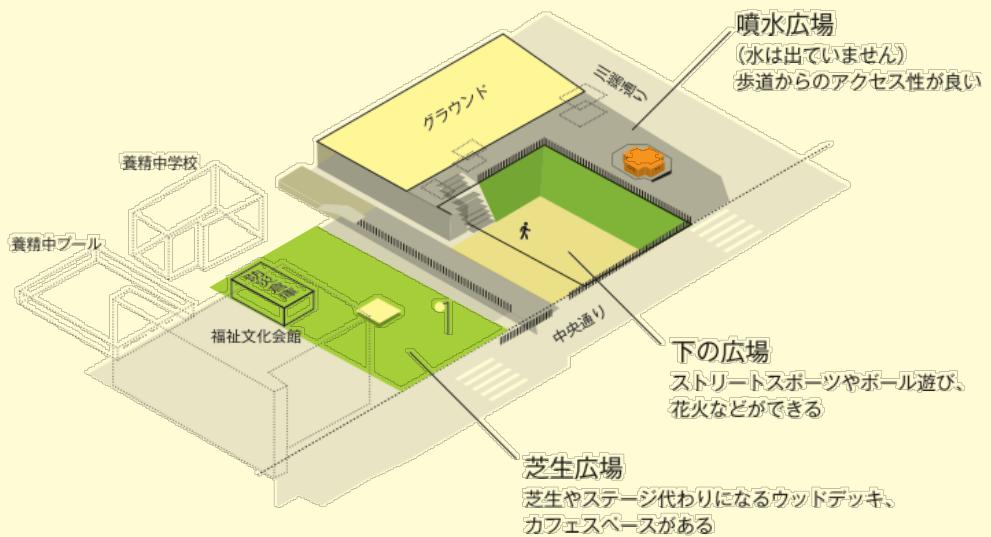
"小さな広場"くらいに感じるサイズが、活動を始めるにも、新しいことを試すのにも"ちょうどいい"と思われる仕掛けです。

## やってみること・見せること

IBALAB@広場があるのは、中心市街地のほぼ真ん中。たくさん的人が行きかう中央通りに面していて、市役所の目の前でもあります。自然と毎日目にする、そんな市の真ん中で行う実験的な企画には、苦情リスクも伴いますが、それを補って余りあるメリットが。

演奏も焚き火も花火も、自然と「見る」⇒「見られる」の関係が生まれ、ふらっと来られるアクセス性も抜群。

視認性とアクセス性の良さは、参加の広がりとオープンな議論につながっていました。

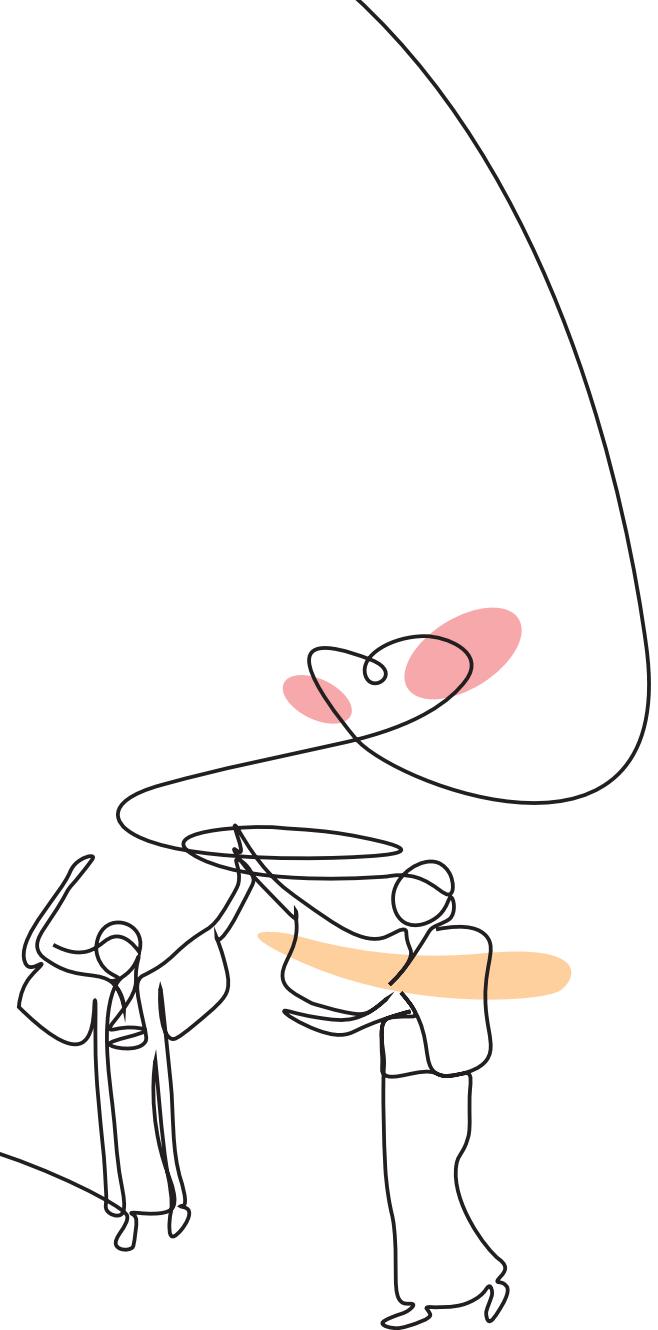


# 広場の風景

IBALAB@広場では、  
「つかう」と「つくる」を繰り返しながら、  
「禁止事項」ではなく「できること」を  
増やしていきました。  
その繰り返しが、非日常な「実験」を  
日常の「風景」に変えていきます。



# 4つのキーワード



「お試し」から



楽しみながら



空間をシェアする



つながる ひろがる



とりあえずやってみたら、意外になんとかなることもあります。

「変化」を見るようにすると、周りの人の不安が解消され、共感に変わったり、「一緒にやりたい！」につながります。

家の庭が狭く、公園も禁止の場所が多い中、  
IBALAB@広場で花火ができる事が  
本当にありがとうございました。

40代 男性

まちなかでたき焚き火ができるなんて最高でした。

30代 女性

娘が芝生で歩く練習をしたり、  
ニワトリを見せてもらったり、盆踊りに参加したり、  
こどもたちと遊んだ思い出がたくさんあります。

50代 男性

大学進学を機に茨木に引っ越してきて、  
IBALAB@広場では市民が自主的に  
イベントを主催していると知りました。  
その輪に加わってお手伝いさせてもらったり、  
仲間と一緒にイベントを主催する経験もできました！

20代 女性

# 「お試し」から

右ページ / 夏の夜の1コマ。スケボーと花火が共存する、  
あまり見られない景色が広場の日常です。





課題とか実験とか難しいことはひとまず置いておいて、「楽しい」から始めるといい感じです。

毎週色々なイベントがあって、平日日中はのんびりできる。  
広場があることで日常の楽しさが少し増したなーと思います。  
遊びに来た人はもちろん、イベントをしている人たちが  
楽しそうなのが印象的でした。

30代 男性

私にとって IBALAB@ 広場は、  
「楽しい」の輪にみんなを巻きこめる場です！  
ここで培われた「楽しい」をつくり共有するマインドが  
これからも続いていきますように！

20代 女性

# 楽しみながら

令和6年度 IBALAB@ 広場クロージング企画 Photo by Nanmie

① - ⑤ 音楽グループ ohana 主催「HALLOWEEN PARTY」  
⑥ - ⑨ ブラフェス実行委員会主催「ブラフェス」

右ページ / ブラジル音楽のご機嫌なリズムに揺られながら、演奏者も楽しそうです。





スケボーしている横でボール遊びをしていたり、花火をしていたり。こどもが主役の企画も大人が楽しむイベントも、のんびりもアクティブも、同じ空間の「シェア」が多様な風景を生み出します。

「芝のみ盆踊り」は毎年参加しました。  
大人がお酒飲みながらこどもと遊べる、  
開放的な場所はわくわくして珍しい！  
世代や年齢に関係なくひらけた場所だなと思います。  
あの広すぎない大きさも良かったのかもしれません。

30代女性

こどもにとって非日常の体験ができる場を提供してくれる場所でした。  
色々な植物が植えられており、ニワトリが飼育されていて、  
ふさふさの気持ちの良い芝生があって、家や普段よく行く近所の  
公園では得られない体験ができたと思います。

40代男性

よちよち歩きの息子と一緒に、  
スケボーのお兄ちゃんたちを見ながら夫の帰宅を  
広場で待つのが習慣でした。

30代女性

# 空間をシェアする

右ページ／落語を楽しそうに聞いているギャラリーは、なんだか若い？  
実はこちらはスケボーイベントの様子。こんなふうに、広場では色々  
「シェア」が生まれます。(12ページにイベント写真掲載)



豊木町  
桜社文化会館  
(オーラシアター)

FIELDOR  
Powered by onostyle.jp

onostyle.jp

車両  
駐止

EON

WALLS  
ARE  
MEANT  
FOR  
CLIMBING



こどもを遊ばせに来ていた保護者同士が友達になったり、イベント出展者同士で意気投合して新しいイベントを生み出したり。広場を共有することによって、様々な人やコトが混ざり合い、つながりが広がっていきました。

「芝のみ」はすごくステキな空間で、  
あのイベントは主催者、来場者、通りすがりの人など、  
色んな人の存在が混ざり合ってできている空間だなと感じます。

20代女性

これからも続していくたくさんの仲間と出会えた場所。  
あそこに行けば誰かがいるという安心感のある場所。  
こたつのようなどんな人も受け入れる温かい場所。

40代女性

# つながるひろがる

令和6年度 IBALAB@ 広場クロージング企画 Photo by Nanmie

① - ⑦ KURASHI cycle・HAVE FUN・CheR 主催「Close to you」

⑧ - ⑪ 茨木コモンズ主催「芝のみ盆踊り」

右ページ / 多世代・多文化（盆踊り×DJ音楽）の、アップデートされた盆踊りイベント。  
イベントをつくる過程から当日まで、たくさんのつながりが生まれています。

茨木市  
IBARAKI CITY

全国戦没者追悼式 正午には黙とうを

初

パリの24オリンピック開場 桶口

黎選手

人権擁護宣言都市

茨木市



# IBALAB@広場の 仕掛けとポイント

価値観が多様化する現代において、公園で遊ぶ子どもの声が時に騒音として捉えられたり、ボール遊びは"迷惑行為"と言われたりもします。なんなら、他者とつながったりしたくないし、近くにいるのも嫌。

消費者としての市民と、管理者としての行政。こんな風に分断される中で、いかにも苦情が寄せられそうな「ラボ」を、どうすればうまく進められるか。

IBALAB@ 広場では、「共有」と「共感」というプロセスを重視して進めました。

ワークショップや様々な企画を通じて、同じ時間や場所を「共有」すると、そこから「いいね！」という「共感」が生まれます。

共感が広がることで、「新しいことを試してみたい！」という人が現れるし、チャレンジを許容する気持ちが周囲に生まれます。

この「共有」、「共感」というプロセスを繰り返すことで、公共空間に"ラボ"的な広場が生まれると考えました。



「共有」、「共感」による広場づくりのために、  
IBALAB@広場には4つのポイントがあります。

Point  
1

## Craft (クラフト)

完成形にしない / 関わりしろ / 自分たちでつくる / アドリブ / 形が変わる、可動性

Point  
2

## Coordinator (コーディネーター)

「初めて」と「始めて」 / 人と人、人と場、人と情報をつなぐハブ

Point  
3

## Commons (コモンズ)

共有・共同管理 / 場をひらく / 公共空間=自分たちの場所

Point  
4

## Communication (コミュニケーション)

お互いにリスペクト / 職員も市民も一緒に楽しむ



Point  
1

完成形にしない / 関わりしろ / 自分たちでつくる / アドリブ / 形が変わる、可動性

# Craft (クラフト)

空間やルールを完成形にせず、みんなが手づくりできる余地を残す。

全部役所が決めるのではなく、与えられるでもない、一緒に悩み考えるプロセスを共有することで、公共空間は変わります。



①広場のルールをみんなで  
考える「ひろばかいぎ」



②ベンチも自分たちでつくります。固定せず、  
持ち運べる重さであることもポイント。



③景観に配慮したスケボーアイテムをつくる  
「花とスケーター」企画。スケーターが寄せ  
植えも。

公共空間って、なぜか乱暴に扱われがち。騒ぎすぎたりゴミが捨てられたりすると、「うるさい」とか「あぶない」といった苦情が寄せられて、「ボール遊び禁止」、「スケボー禁止」のように禁止が増えています。

でも使う人たちも自分たちで考えたルールなら納得できるし、みんなでつくった施設は大事にしてくれる。

広場の設えも既製品ではなく、この場のための手づくりであることは、変化にも柔軟に対応できます。

「まずは試してみて、どんどん変えてもいい。」

だから、IBALAB @広場のスタート当時、唯一のルールは「禁止事項ではなく、できることを増やしていく」だけ。

ベンチも市民ワークショップでつくったもの。しかも自由にレイアウトできるように、簡単に運べる重さです。

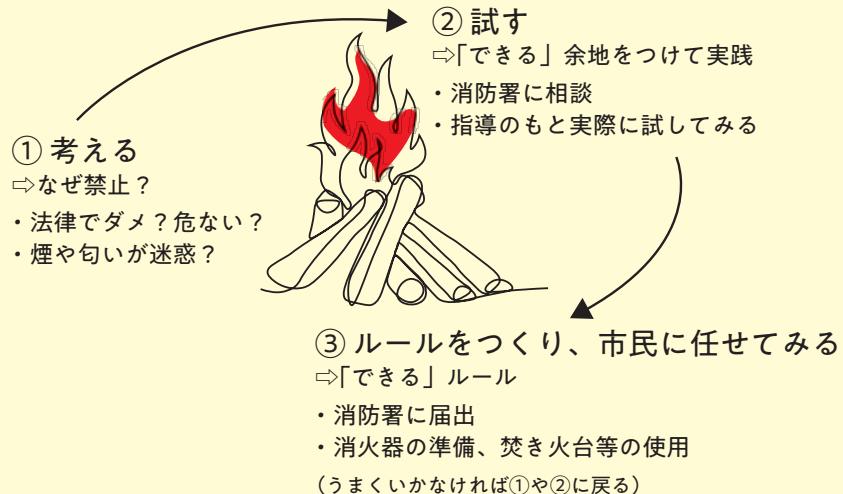
大事なのは、空間にもルールにも「関わりしろ」があること。自分たちでつくること。

## みんなで試して更新するルール



焚き火、花火、バーベキューなど、普通の公園なら最初から「禁止」と言われることも、何が問題なのかをみんなで考えて実際に試して、どうやったら「できるルール」になるかと一緒に考えます。一度つくった「できるルール」も、何か問題があればバージョンアップして変えたらいい、そんな手づくり感も大事です。

### 広場で焚き火ができるまで



## 「できる」をシェアする



夏休みには、花火をやりたい人たちがたくさんやって来ます。そんな日に、いつも広場を使っているスケーター達は、占用するでも場所を争うのではなく、端っこで小さく練習したり、談笑しながらスペースが空くのを待っています。

自分たちで「できる」をつくっているからこそ、誰かの「できる」を大事にする、「シェア」の感覚が共有されています。

地面に落書きだって。  
ちゃんと自分たちで掃除するならOKかも、  
ということで試してみました。



「初めて」と「始めて」／人と人、人と場、人と情報をつなぐハブ

# Coordinator (コーディネーター)

場があるだけでは、単なる空間、バラバラ単発の活動が見られるだけです。

場を使う「人」と「人」をつないだり、新しいことを始めたい「人」と「場」をつないだり、

広場に込められた想いを共有し、出来事、課題、悩みといった「情報」と「人」をつないだり。

ハブとなるコーディネーターがいることで、コミュニティが生まれます。

人と人を  
つなぐ



コロナで中止になっている地元の盆踊りを IBALAB@広場で開催したいとやってきた盆踊りの先生たち。コーディネーターが、音楽イベントなどを開催していたグループにつないだら、屋台の代わりにキッチンカーが出店し、やぐらにはDJブース、大人もこどもも輪になって踊る、レトロで新しい盆踊りが生まれました。コーディネーターが人と人をつなぐことで、新しい活動が生まれました。

人と場を  
つなぐ



「ウッドデッキをステージにしてみたら」、「ここにベンチを置くとふらりと立ち寄った人が聞いてくれるかも」など、活動が初めての人にも、この場所で何か始める人にも、一緒に使い方を考えてくれるコーディネーターが「場」とつなぐことで、活動が豊かになり、広場の魅力が増します。

写真は、初めてイベントをする人に一からコーディネーターが伴走する企画「hop step day」の振り返りの様子。

# 人と情報をつなぐ

大音量で音楽イベントができたら自分たちは気持ちいいかもしれません、うるさいって苦情がきたら次の誰かができなくなるし、楽しく花火をやっていても、次の日ゴミだらけだと、片付けをする職員は、いっそ禁止にしたくなります。

そうならないために、コーディネーターは、広場のコンセプト、そこに込められた想いを「使う人」たちに伝え、出来事を広く周知・共有します。

コンセプトに共感した人が、新たな物語を生み出していくことで、IBALAB @広場は次々と新しい活動が紡がれ、コミュニティが生まれる公共空間になりました。

IBALAB@広場を単に貸し出すだけではなく、利用される方と「一緒に考えること」を大切にしながら、やりたいことをかたちにするお手伝いをしたり、活動を続けていくために必要な人や情報を伝えするハブのような存在でいられるよう心掛けていました。また、小さな一歩から始まった活動が継続していくことで、広場を飛び出して市内外へと広がり、市の活性化につながることを目標にしていました。

IBALAB@広場コーディネーター 萩本 真由美

例えば、これまでのイベントで試してきた音量やスピーカーの向きなどの情報を伝えることで、よりよい形で次も使えるし、どんな企画が実施されるかを広く伝えることで、参加者とファンを増やしていきます。

そしてなによりも「想い」(コンセプト)を共有することで、共感したファンが次の「使う」を考え、広場を育てていきます。



Point  
3

共有・共同管理 / 場をひらく / 公共空間＝自分たちの場所

# Commons (コモンズ)

「コモンズ」は本来、共有地や公園、共同管理などの意味を持ちますが、現代的には、「公」でも「私」でもない、「共」、あるいは誰にでもひらかれた「第3の場所」とも言われています。そんな「コモンズ」が IBALAB @広場のポイントの一つ。行政は場をひらく、市民は楽しみながら運営にも参加する、困ったことが起きたときには行政に任せるとではなく一緒に考え、設えが傷んだら一緒に修理する、そんな公共地でもなく私有地でもない、コモンズな風景をめざしたのがIBALAB @広場です。

## みんなで広場を運営する 広場運営社会実験

### 【茨木コモンズ】

市民による管理運営を試みる実験に協力いただいたのは、茨木市内の有志のメンバーで活動する「茨木コモンズ」。広場のカフェ「いばらきコモンファクトリー」をはじめ、市内産品を販売する「いばらきマルシェ」、D.I.Yイベント「芝のみ」など、カフェ運営や多彩な企画を展開。誰よりも広場を使いこなしながらストリート・アートなど新しい属性のコミュニティを生みました。



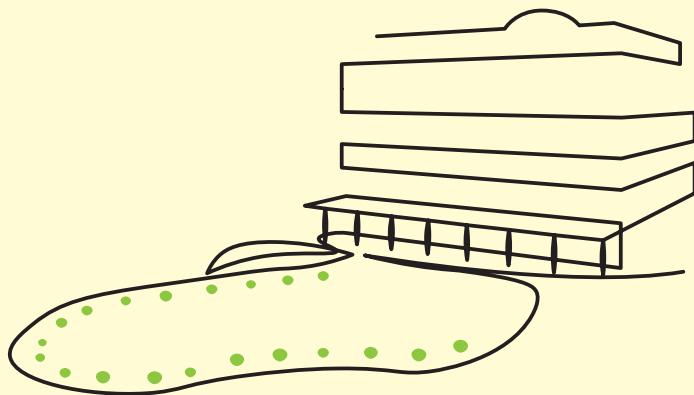
## みんなで広場を維持する デッキ塗り直し、倉庫整理などをイベント化

### 【Locaco Project】

広場が使われていくと、ウッドデッキの塗装は剥がれ、イベント主催者が使う備品倉庫もどんどん散らかります。「D.I.Yまちづくり」が活動テーマの「Locaco Project」は、自身も広場ユーザーだからこそ、デッキ塗装をイベント化したり、備品をまとめやすいラックをつくりたり。

自分事として、楽しみながら広場の維持に一役買いました。





Point  
4

お互いにリスペクト／職員も市民も一緒に楽しむ

# Communication (コミュニケーション)

「みんな」で何かするには、コミュニケーションが重要なポイントになります。そのため、ワークショップや「ひろばかいぎ」など、様々な仕掛けがありますが、意識しておくべきは「みんな」には市民だけでなく、市の職員も含まれること。職員は「管理者」、市民は「消費者」ではなく、お互いにリスペクトしながら、そして楽しみながら、フラットな立場でコミュニケーションを取れていることが信頼関係につながります。

## みんなで広場にコミュニティをつくるコミュニティガーデン

### 【エシカリズム・Towth(トゥース)】

自由に参加できるひらけた「庭」を目指したコミュニティガーデン。育てる、収穫する、循環する（コンポスト）体験をみんなで共有したり、ときには野菜やコンポスト、コットンなどを使ったイベントも。広場の中の「ガーデン」ってどんな空間？というイメージづくりから、大学生や市民団体と一緒に考えました。



# つづくひろがり

## あなたにとっての IBALAB@広場とは？



ohanaにとって、まさに「はじまりの場所」です。この場所があったからコロナ禍でも活動が続けられたり、多くの人にohanaを知ってもらうことができました。ここでの出会いと思い出は私たちにとって本当に宝物です。

音楽グループ ohana

國澤さやかさん 阪脇乃理子さん 正木敬代さん



大学生の頃から通っていたIBALAB@広場にはたくさん思い出があるけど、行けば誰か友達がいる、広場は僕たちローカルの集合場所になっていました。新しい誰かと出会え、笑顔も生まれる場所でした。市役所の方と一緒にスケボーアイベントをしたのもいい思い出です。

スケーター 橋暁良さん



高校2年生の時にhop step dayというチャレンジ企画に参加し、昆虫の魅力を伝えるイベントをしました。参加者や来場者の方々との交流は、大学進学だけでなく人生においてもかけがえのない宝物となりました。現在は静岡に住んでいますが、街の中心部にこのような空間をもつ茨木市が誇らしいです。

大学生 宇山昂佑さん



IBALAB@広場は、市民と行政が一緒に創り、育ててきた実験の場でした。カフェ運営や広場の管理、イベント企画をしながら、環境や採算の面では試行錯誤の連続。実験だからこそ難しさもありましたが、続けてことでたくさんのコミュニティが生まれ、広場の価値もどんどん広がっていました。ここでできたつながりや経験は、僕にとっても、まちにとっても大切な財産。生まれた熱量が、これから茨木のまちづくりにもつながっていくことを願っています。

茨木コモンズ 藤井茂男さん



プロジェクトの語源は、前に投げる。まず前へ、放つてみる。すべてはそこから。「暫定」活用をこれほど！活かしきったプロジェクトを私は他に知らない。初訪問の際に目にした「次なる茨木へ。」の言葉に触発され、新参者ながらなるべく高い球を！皆さまと共有した日々。愉快でした。与条件を明快に整理、フィールドを確立し、期間限定だからこそ！のハイテンションで駆け抜けた皆さまがこれから創造される茨木の日常を、心より楽しみしております。

眺めニスト 山下 裕子さん



IBALAB@広場では防災倉庫の看板やピクトグラムを制作させていただきました。「実験」という名のもとにあつたこの場所は、まちの真ん中にあつたにも関わらず、かつてまちに多く見られた、空き地だったのだと思います。空き地とは単に場所のことだけではなく、頭の中の空き地のようでもあり、意味を与えられるのではなく、ひとりひとりが意味を考えることのできる場所でした。制作したピクトグラムは、本来共通の記号となるはずのサインを、あえてモデルを使い個性を持ったサインにしました。たとえ記号でもそれぞれに個性やストーリーが込められたものにしたいという想いで制作しています。それは私たちがこれからもそんなまちであって欲しいという願いでもありました。

One Art Project 稲垣 元則さん 藤本 聖美さん



与えられた公共ではなく、使う人それぞれが、自らの意思で行動を起こし（自立）、個々の活動が繋がりとシビックプライドを生む（共生）。まさにコンビビアリティ（自立共生）を体現する空間が IBALAB@広場だと思います。私はおにくるの設計を伊東豊雄建築設計事務所と共に担当させていただきましたが、この土壤があることが、設計に勇気を与え、よい建築を創る原動力になりました。おにくる、そして次へ引き継がれていくことを願っています。

株式会社竹中工務店 大阪本店 設計部 市川 雅也さん

## 「IBALAB@広場」の社会実験を終えて

広場がオープンしてからの約4年半、ふらっと遊びに来る人から頻繁にイベントを行う人まで、たくさんの人の思い出になり、新しい風景が生まれました。

また、広場を起点に新たな活動や人のつながりを生み、「行けば何かに出会える場所」として、IBALAB@広場は共感を集めています。これは、茨木市の特徴の一つでもある「活動的な市民が多い」ことが風景として可視化されたのだとも思います。

「おにくるための実験場」としてスタートした IBALAB@広場ですが、多彩な活動や人、一緒に育てた想いは、「いいね」という共感を集め、共鳴するかのようにまち全体に広がっていたように感じます。

IBALAB@広場の社会実験は終わりますが、その想いを引継ぎ、おにくるはこれからも「共創の実験場」であり続けようと思います。

最後に、この冊子を見て、何か活動を始めたくなったり、「豊かな空間づくり」に悩んでいる施設管理者が、一步を踏み出す後押しになれば幸いです。

茨木市 市民文化部 共創推進課



次なる  
茨木へ。

茨木市 市民文化部 共創推進課  
TEL : 072-631-0277  
E-mail : kyousou@city.ibaraki.lg.jp



茨木市文化・子育て複合施設おにくる  
TEL : 072-631-0296 (代表)  
E-mail : ibaraki-arts@sps.sgn.ne.jp

